

2025(令和7年)年12月8日(月)発行

(発行所) 一般社団法人応用生態工学会事務局〒102-0083 東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室

TEL: 03-5216-8401 FAX: 03-5216-8520 E-mail: eces-manager@ecesj.com HP: <https://www.ecesj.com/>

(発行者) 一般社団法人応用生態工学会 (編集責任者: 専務理事 光成政和 事務局長 齊藤泉)

1 はじめに	1
2 第2代会長挨拶	1
3 第2期第1回総会報告	2
4 理事会報告	5
5 応用生態工学会第28回新潟大会2025(朱鷺メッセ)開催報告	7
6 第2回廣瀬賞発表・受賞講演会報告	28
7 2025年度派遣報告	30
8 行事予定・報告	36
9 2025年度行事経過と今後の予定	39
10 事務局より	40

## 1 はじめに

今号では、第2代会長に就任が決まった清水義彦新会長（群馬大学名誉教授）の会長挨拶、総会報告、理事会報告、第28回全国大会(新潟大会)開催報告、廣瀬賞発表・受賞講演会報告、行事報告などをお伝えします。

「9. 事務局より」に記していますが、会員の皆様に向けて、会員管理サービスシステムの活用をお願いします。当該システムの「マイページ」にある、「会員情報を変更する」のページの最下段に、「総会招集の通知および総会関係書類の電磁的方法による送付」の選択項目があります。電磁的方法（インターネット）による総会開催通知等の受取りの許諾をお願いします。皆様のご協力が、事務局業務と経費の低減に大きく寄与します。未選択の正会員におかれましては、是非ご協力をお願いします。

## 2 第2代会長挨拶

このたび、一般社団法人応用生態工学会初代会長である古部城太郎会長の後任として、第2代会長に選任していただきました清水です。この3月に群馬大学理工学部を退職しまして、4月より（国研）土木研究所水災害リスク・マネジメント国際センターで研究・研修指導の任にあたっております。

私は土木工学の出身で、任意法人時代の応用生態工学会第6代会長の辻本哲郎先生とともに、河川植物が流れや土砂輸送に与える影響について水理学的研究を進めてまいりました。これが、私の学位論文およびその後の研究の基盤となっております。その後は、河道



内樹林化や砂州河川の二極化（河道横断面内比高の拡大）に関する水理現象を対象として、国土交通省河川事務所や民間技術者の方々と連携し、砂州掘削路による洪水攪乱の誘発を通じた樹林化や二極化の抑制について、フィールド研究を行ってまいりました。これらの研究は、主として樹林化による流下能力の阻害を解消し、水衝部対策などの治水効果を目的としたものですが、同時に植物繁茂の抑制や礫河原の再生といった河川環境の保全・再生にもつながるものです。しかしながら、生態学的な視点を十分に取り入れるまでには至らなかったことは、大きな反省点であります。

河川の物理基盤としての水理学に生態学的視点が加わることで、水理の研究はより深化し、実践的な学問へと発展することが期待されます。同様に、生態学の研究者が河川水理の視点を取り入れることによっても、研究の新たな展開と広がりが生まれるものと思います。

土木と生態が連携してこうした相乗効果を生み出すこと、そしてそれを支えるのは研究者間の連携のみならず、国土管理を担う行政技術者、現場を支える民間技術者との協働であり、これこそが本学会の大きな特徴であります。

本学会を立ち上げ、今まで牽引してこられた官・民・学の諸先輩方によって、応用生態工学の理念は確立され、その実践が積み重ねられてきました。そのような経験を十分に持たない私が、このたび会長を務めさせていただくことになり、正直なところ大きな躊躇いもございます。しかし、応用生態工学という学問に真摯に向き合い、学会活動にいかに貢献できるかという課題を、この時期に与えられたものとして受け止めております。

これまで培われてきた応用生態工学の流れを引き継ぎつつ、次にどのように発展させていくか。学会の持続性と発展性は、いずれの学会においても大きな課題です。次の世代にとっても、本学会がより一層魅力ある場となり、探求と実践の楽しさにあふれる学術・技術のフィールドであり続けること。そのための取り組みを、皆さまとの連携と協働のもとに進めてまいりたいと考えております。

これから約2年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

令和7年9月13日 会長 清水 義彦

### 3 第2期第1回総会報告

第2期第1回総会における決議事項、報告事項について、下記の通り報告します。

1. 開催日時：開催日時:2025年9月13日(土)午前9時30分～午前10時28分
2. 開催場所： 新潟県新潟市中央区万代島6-1  
朱鷺メッセ国際会議室
3. 出席した正会員（社員）の数及びその行使することができる議決権の数
  - (1) 議決権のある本会の正会員の総数 790名
  - (2) 総正会員の議決権の数 790個
  - (3) 出席正会員数（会場出席者50名、委任状提出者339名・議決権行使書提出者147名）  
536名
  - (4) 出席正会員の議決権の数 536個
4. 出席役員 会長（代表理事） 占部城太郎

副会長（理事） 東信行  
副会長（理事） 清水義彦  
副会長（理事） 藤田光一  
専務理事（理事） 天野邦彦  
理事 沖津二朗  
理事 小俣篤  
理事 片野泉  
理事 北村匡  
理事 佐藤高広  
理事 島村彰  
理事 関島恒夫  
理事 平井秀輝  
理事 光成政和  
理事 柳川晃  
理事 吉田丈人  
理事 渡邊康玄  
監事 鳥居敏男

5. 議長 内藤正彦
6. 議事録の作成に係る職務を行った者 光成政和理事
7. 議題

## 1 決議事項

- 1 - 1 第1号議案 2024(令和6)年度決算承認の件
- 1 - 2 第2号議案 役員選任の件

## 2 報告事項

- 2 - 1 2024(令和6)年度事業報告
- 2 - 2 2025(令和7)年度事業計画案
- 2 - 3 2025(令和7)年度予算案
- 2 - 4 会員状況報告
- 2 - 5 総会・理事会・委員会の開催状況報告
- 2 - 6 会誌「応用生態工学」編集状況報告
- 2 - 7 委員会再編報告
- 2 - 8 地区会設置報告
- 2 - 9 諸規程の策定状況報告
- 2 - 10 2026年全国大会（検討状況）

## 8. 議事の経過の要領及びその結果

定刻になり、天野専務理事が開会を宣言し、齊藤事務局長から、本総会は、定款第17条第1項の規定による定足数を満たしており、適法に成立した旨の報告があった。次いで、定款第15条の規定により、

出席した正会員の中から内藤正彦会員が議長に選出された。さらに、議長は、定款第20条第1項の規定により、議事録署名人として、島村理事および鳥居敏男監事を指名し、議案の審議に入った。

### 【決議事項】

#### 第1号議案 2024（令和6）年度決算承認の件

議長は第1号議案を上程し、天野専務理事が、定款第12条に基づき、2024（令和6）年度決算承認の件、任意団体からの寄付の件、任意団体から一般社団法人への資金移動報告、2024（令和6年）年度決算報告について説明し、鳥居監事が監査報告について説明した。このことについて、特段質問等はなく、会場出席者全員が賛成であることを確認した。会場出席者50名、委任状提出者339名・議決権行使書提出者のうち、第1号議案に賛成する者147名の合計536名の賛成が得られたことから、賛成者が全正会員の過半数であると認め、第1号議案は承認可決された。

#### 第2号議案 役員選任の件

議長は第2号議案を提出し、天野専務理事から、理事の全員が本総会の終結と同時に任期満了し退任することになるのでその選任が必要である旨及び監事を新たに選任したい旨を述べ、第2期役員候補者の選考に関し、役員候補者選考委員会規程第2条及び第3条に則り、役員候補者選考委員が選出され、役員候補者選考委員会が設置されたこと、同委員会が次期役員候補者の募集を行い、理事候補24名、監事候補1名の計25名の届出があったこと、地区のバランスを勘案し、役員候補者選考委員会規程第5条第3号に則り、役員候補者選考委員会により1名の理事候補を追加し理事候補として合計25名を選考したこと、また本総会において選任された理事による理事会の決議によって会長、副会長、専務理事が選定されるが、役員候補者選考委員会は、理事候補者の中から会長、副会長、又は専務理事にふさわしい者について意見を述べることが出来るため意見を付記したことを説明した。

第2期役員候補者のうち、理事候補25名（五十嵐美穂氏、石田裕子氏、宇野裕美氏、沖津二朗氏、小俣篤氏、久加朋子氏、佐藤高広氏、島村彰氏、清水義彦氏、高橋陽一氏、高村裕平氏、田中規夫氏（欠席）、千葉武生氏、内藤正彦氏、中村圭吾氏（欠席）、根岸淳二郎氏、服部敦氏（欠席）、林博徳氏（欠席）、樋村正雄氏、平井秀輝氏、光成政和氏、三宅洋氏、森誠一氏（欠席）、吉田丈人氏、吉村千洋氏（欠席））、監事候補1名（柳川晃氏）について、天野専務理事が一人一人名前を読み上げ、その都度、議長は反対する正会員の挙手を求めたが、会場には反対者がおらず会場出席者全員が賛成であることを確認した。会場出席者50名、委任状提出者339名・議決権行使書提出者のうち、第2号議案に賛成する者146名の合計535名の賛成が得られたことから、賛成者が全正会員の過半数であると認め、第2号議案は承認可決された。

なお、総会に参加した被選任者全員（五十嵐美穂氏、石田裕子氏、宇野裕美氏、沖津二朗氏、小俣篤氏、久加朋子氏、佐藤高広氏、島村彰氏、清水義彦氏、高橋陽一氏、高村裕平氏、千葉武生氏、内藤正彦氏、根岸淳二郎氏、樋村正雄氏、平井秀輝氏、光成政和氏、三宅洋氏、吉田丈人氏、柳川晃氏）は席上その就任を承諾した。総会を欠席した被選任者については、総会において選任されることを条件とした就任承諾に対する内諾を事前に得ている。

### 【報告事項】

#### 2-1 2024(令和6)年度事業報告

- 2-2 2025(令和7)年度事業計画案
- 2-3 2025(令和7)年度予算案
- 2-4 会員状況報告
- 2-5 総会・理事会・委員会の開催状況報告
- 2-6 会誌「応用生態工学」編集状況報告
- 2-7 委員会再編報告
- 2-8 地区会設置報告
- 2-9 諸規程の策定状況報告
- 2-10 2026年全国大会（検討状況）

天野専務理事から2-1 2024(令和6)年度事業報告、2-2 2025(令和7)年度事業計画案について、報告を行い特段の質問は無かった。

天野専務理事から2-3 2025(令和7)年度予算案について、報告の中で実質的な赤字額が約230万円になることを説明したが、特段の質問は無かった。

天野専務理事から2-4 会員状況報告、2-5 総会・理事会・委員会の開催状況報告、2-6 会誌「応用生態工学」編集状況報告、2-7 委員会再編報告、2-8 地区会設置報告、2-9 諸規程の策定状況報告について、報告を行い特段の質問は無かった。

天野専務理事から、2-10 2026年全国大会（検討状況）について、2026年は東京大学で行うことが報告され、大会実行委員長の吉田理事から挨拶があった。

以上をもって議事の全部の審議を終了したので、議長は午前10時28分閉会を宣した。

## 4 理事会報告

第1期第9回通常理事会及び第1期第10回書面理事会並びに第2期第1回通常理事会における決議事項、報告事項等について、下記の通り報告します。

### ・第1期第9回通常理事会

- 1 開催日時 令和7年8月27日（木） 10時から12時42分
- 2 開催場所 河川財団会議室（Web方式併用）
- 3 出席者 理事総数 20名
  - 出席理事 16名（定足数11名）
    - 会長 占部城太郎
    - 副会長 東信行(WEB参加12時まで)、清水義彦、藤田光一(WEB参加)
    - 専務理事 天野邦彦
  - 理事 沖津二朗、小俣篤（12時まで）、片野泉(WEB参加12時まで)、佐藤高広、島村彰(WEB参加10時30分より)、関島恒夫、西廣淳、平井秀輝(WEB参加)、光成政和、柳川晃(WEB参加)、吉村千洋(WEB参加)、渡邊康玄(WEB参加)（17名）
  - 出席監事 1名
  - 監事 鳥居敏男

- 4 その他出席者 事務局長 齊藤泉
- 5 議長 会長 占部城太郎
- 6 議事録作成者 専務理事 天野邦彦
- 7 議題

#### 決議事項

- 第1号議案 令和6年度決算承認の件
- 第2号議案 次期役員候補者の件
- 第3号議案 地区会承認の件
- 第4号議案 経理規程制定の件
- 第5号議案 委員会規程制定の件
- 第6号議案 要望書、意見書等の発出手続に関するガイドライン制定の件
- 第7号議案 総会資料承認の件
- 第8号議案 新規入会希望者承認の件

#### 報告事項

- 1 任意団体の清算結了および財産譲渡の報告
- 2 委員会からの報告

#### その他事項

- 1 2025年度総会開催予定について

※決議事項の議案については、全て承認可決されました。

### ・第1期第10回理事会

- 1 開催日時 令和7年9月13日（土） 9時から9時15分
- 2 開催場所 新潟県新潟市中央区万代島6-1  
朱鷺メッセ小会議室
- 3 出席者 理事総数 20名  
出席理事 17名（定足数11名）  
会長 占部城太郎  
副会長 東信行、清水義彦、藤田光一  
専務理事 天野邦彦  
理事 沖津二朗、小俣篤、片野泉、北村匡、佐藤高広、島村彰、関島恒夫、平井秀輝、  
光成政和、柳川晃、吉田丈人、渡邊康玄（17名）  
出席監事 1名  
監事 鳥居敏男

- 4 その他出席者 事務局長 齊藤泉
- 5 議長 会長 占部城太郎
- 6 議事録作成者 専務理事 天野邦彦
- 7 議題

#### 決議事項

- 第1号議案 新規入会希望者承認の件
- 第2号議案 2026年度全国大会開催予定について

#### 報告事項

- 1 今期役員の退任の報告

※決議事項の議案については、全て承認可決されました。

### ・第2期第1回理事会

- 1 開催日時 令和7年9月13日（土） 13時から13時42分
- 2 開催場所 新潟県新潟市中央区万代島6-1  
朱鷺メッセ小会議室
- 3 出席者 理事総数 25名  
出席理事 19（定足数13名）  
会長 清水義彦  
副会長 沖津二朗、平井秀輝  
専務理事 光成政和  
理事 小俣篤、佐藤高広、島村彰、吉田丈人、五十嵐美穂、石田裕子、宇野裕美、久加朋子、高橋陽一、高村裕平、千葉武生、内藤正彦、根岸淳二郎、樋村正雄、三宅洋（19名）  
出席監事 2名  
監事 鳥居敏男、柳川晃
- 4 その他出席者 前会長 占部城太郎（第1号議案まで）、前専務理事 天野邦彦（第1号議案まで）、事務局長 齊藤泉
- 5 議長 前会長 占部城太郎（第1号議案まで） 会長 清水義彦
- 6 議事録作成者 専務理事 光成政和
- 7 議題  
決議事項  
第1号議案 会長、副会長および専務理事の選出の件  
第2号議案 担当役員決定の件  
報告事項  
1 本人確認証明書提出の依頼  
※決議事項の議案については、全て承認可決されました。

## 5 応用生態工学会第28回新潟大会2025(朱鷺メッセ)開催報告

### 1. あいさつ（大会実行委員長 関島 恒夫）

今年の応用生態工学会第28回大会は、2025年9月11日～14日に「水の都にいがた」で開催しました。メインの会場は、新潟駅から少し離れたところにある新潟大学五十嵐キャンパスとし、公開シンポジウムは、大勢の市民の方々にも参加いただけるよう、新潟駅にほど近い朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターでの開催といたしました。

開催地である新潟市は、埼玉・山梨・長野の県境を源流とする日本最長の信濃川と、猪苗代湖や尾瀬沼の雪解け水を集めて越後平野に流れ込む日本最大級の水量を誇る阿賀野川の二大河川の河口付近に発達した都市で、ラムサール条約に登録されている佐潟に加え、ハクチョウ類やガン類など大型水禽類の国内有数の越冬地として知られる福島潟や鳥屋野潟など、大小多数の潟が点在する国内有数の水辺豊かな地域です。さらに令和4年、出水市と並んで、新潟市は国内初となる「ラムサール条約湿地自治体認証制度」に基づく認証を受け、国際湿地都市NIIGATAとしての第一歩を踏み出すことになりました。新潟市が推進する街づくりの理念は、応用生態工学会の達成目標でもある「人と生物の共存」「生物多様性の保全」「健全な生態系の持続」をまさに形にしようとしたものであり、本学会員の方々も高い関心を持ってご参加いただ



けたのではないかとご賢察いたします。

大会参加者数は、当初、地方開催であることもあり、昨年度実績を大幅に下回ると見込んでおりましたが、実行委員会の予想を大幅に上回り、正会員190名、非会員45名、学生51、当日参加学生2名で総計288名となり、地方での開催であったにも拘わらず、大変賑わいのある会となりました。

研究発表としては、口頭発表39件、ポスター発表80件の発表をいただき、自由集会10件と大変盛会となりました。また、受賞したポスターは、公開シンポジウムを開催したトキメッセ国際会議場のラウンジに掲示し、市民も含め公開シンポジウムにご参加いただいた多くの来場者にご覧になっていただくことができました。10企業・3団体の展示では、各企業の特色ある最新の技術サービスや製品に加え、新潟ならではの特色ある商品や取り組みを紹介していただき大変好評でした。最終日には、昨年度から始まった「廣瀬賞」の発表と受賞者の講演会を実施しました。その後行われた公開シンポジウム「生態系ネットワーク形成を基軸とした地域づくりを目指して」では、新潟市長、小山市長、出雲市長の3人の首長にご参加いただき、パネルディスカッションでは有識者を交えて活発な意見交換がなされました。なお、公開シンポジウムには182名の方々にご来場いただくとともに、317名の方々にオンライン参加いただき、参加者数が合計約500名となる大変盛況なシンポジウムとなりました。翌日のエクスカーションでは、前日の公開シンポジウムで題材とした生態系ネットワーク形成の取組を「見る、知る、味わう」ことを目的として、はじめに、越後平野生態系ネットワーク形成の現場である信濃川やすらぎ堤を、続いて、阿賀野川自然再生事業として沢梅地区の浅場の再生、同じく阿賀野川自然再生事業として大河原樋管の横断的連続性の確保、自然農法の取組として宮尾農園、潟水面の拡張として福島潟を順次視察しました。昼食会では、ビューフ島潟において、ヒシの実やザリガニといった潟の産物を素材にした「潟弁当」を味わっていただき、改めて潟や川の恵みを堪能しました。その後、ビューフ島潟6Fの展望ホールにて、一般の方も参加可能な公開トークセッションを開催し、生態系ネットワーク形成の意義と今後の推進について意見を交わしました。

本大会は、「大会概要」に詳細をご報告しますように、大きなトラブルもなく大盛況のうちに終えることができました。懇親会では、普及・連携委員会からご提供いただいた全国からの美味しいお酒とおつまみで、世代を超えた交流を楽しむことができました。これもひとえに実行委員会の皆様、学会本部の関係者、および参加者の皆様のご支援の賜物と考えます。

本大会における、皆様の活発な意見交換、最新知見の共有、そして全国各地からお集まりいただいた参加者皆様の交流の成果を次に繋いでいただくことを期待して、ご報告と御礼の言葉とさせていただきます。

## 2. 大会概要

第28回新潟大会の概要は以下のとおりです。

### (1) 会場

【研究発表】新潟大学 五十嵐キャンパス（新潟市西区）



総合教育研究棟（自由集会・口頭発表会場）



ライブラリーホール（ポスター発表会場）



受付の風景



【シンポジウム・廣瀬賞授賞式・記念講演】朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンター・国際会議室  
(新潟市中央区)

(2) 大会日程 2025年9月11日(木)～14日(日)

- ・9月11日(木) 研究発表(ポスター)、自由集会、企業展示
- ・9月12日(金) 研究発表(口頭・ポスター)、自由集会、委員会、企業展示、懇親会
- ・9月13日(土) 公開シンポジウム、総会、幹事会・理事会、企業展示、廣瀬賞記念講演会・表彰式
- ・9月14日(日) エクスカーション

(3) 開催方法

対面(公開シンポジウムのみ対面+Webのハイブリッド開催)



### 3. 研究発表

発表件数は、口頭発表が39件、ポスター発表が80件の合計119件でした。今回の発表件数を第14回札幌大会から第27回さいたま大会まで(第16回、第21回、第25回は3学会合同大会のため対象外)と比較すると以下のように推移しており、今回大会は平年並みの発表件数となりました。

年	大会名	口頭発表件数	ポスター発表件数	合計
2010年	第14回札幌大会	36	68	104
2011年	第15回金沢大会	43	50	93
2013年	第17回大阪大会	45	70	115
2014年	第18回東京大会	45	73	118
2015年	第19回郡山大会	47	75	122
2016年	第20回東京大会	45	75	120
2018年	第22回東京大会	41	71	112
2019年	第23回広島大会	42	71	113
2020年	WEB研究発表会	53(オンライン発表)	(ポスター発表無し)	53
2021年	第24回札幌大会	109(オンライン発表)	(ポスター発表無し)	109
2023年	第26回京都大会	54	78	132
2024年	第27回さいたま大会	46	92	138
2025年	第28回新潟大会	39	80	119

#### (1) 口頭発表

口頭発表は、39件の応募を頂きました。発表内容は12のセッションによる発表が行われました。各セッションの内訳は、河川環境(8件)、物質循環(1件)、生息場・生息地評価(11件)、モニタリング(3件)、ダム(3件)、海岸・海域・汽水域(2件)、外来種(2件)、環境DNA(2件)、保全生態(4件)、動物(3件)でした。

最優秀口頭発表賞は、株式会社建設技術研究所の瀬口 雄一さん発表の「水温の上昇がアユの産卵や遡上に及ぼす影響～水温が上昇すると孵化と遡上が遅くなる～」が受賞されました。

今回の発表は、発表者各自が持ち込んだPCにHDMIケーブルを接続してスライドを投影いただく形式で開催しました。大きなトラブルもなく無事に口頭発表を進めることができたのは、発表者皆様の事前の接続確認や座長の的確な進行の賜物と存じます。この場を借りてお礼申し上げます。

報告：布野隆之（兵庫県立大学大学院）

#### (2) ポスター発表

ポスター発表は、総数80件の応募を頂きました。ポスター発表については、発表タイトルやキーワードを踏まえ、4つのセッションに分類しました。セッションの内訳は、河川環境・ダム(24件)、環境DNA(14件)、外来種・動物・道路・カーボンニュートラル・海岸・海域・汽水域・保全生態・モニタリ

ング・生息場・生息地評（27件）、植物・植生・グリーンインフラ・環境修復・その他（15件）としました。

発表当日は、コアタイムをAとBに分けて実施頂きましたが、コアタイム以外の時間も含め、多数の来場者が訪れており、質疑応答や活発な意見交換等が行われているのが各所で確認されました。

なお、最優秀ポスター発表賞は、土木研究所の大石 銀司さんの発表による「”水際の複雑さ”と複雑さに寄与する要素の影響分析【PA2-03】が受賞されたほか、優秀ポスター発表賞として、9件が受賞されました。

最後に発表者の皆様、来場者の皆様、それから運営スタッフの皆様に、活発なポスター展示を無事に終えられた事に対して、この場をお借りしてお礼を申し上げます。



ポスター会場の様子（コアタイム A）



ポスター会場の様子（コアタイム A）

報告：村上拓彦（新潟大学）

### （3）発表賞

表彰は、審査対象を若手研究者（学部学生、大学院生、ポスドク等の若手会員）及び現場技術者または行政担当者とし、事前に審査対象となることを希望した発表者に限定しました。大会実行委員会および研究発表会表彰運営委員会を中心に優秀発表賞審査委員会を組織し、厳正な審査を経て受賞者を選考しました。ポスター発表では、80件中62件が優秀発表の審査対象となり、10件を「優秀ポスター発表賞」に選定しました。さらに最も優れたポスター発表1件を「最優秀ポスター発表賞」に選定しました。



表彰式参加の受賞者

口頭発表では、39件中21件が優秀発表の審査対象となり、6件を「優秀口頭研究発表賞」に選定しました。さらに最も優れた口頭発表1件を「最優秀口頭発表賞」として選定しました。

受賞された研究発表は以下のとおりです。

報告：星 剛介（アジア航測株式会社）

【最優秀ポスター発表賞】「※」は発表者を示す。

PA2-03 ”水際の複雑さ”と複雑さに寄与する要素の影響分析

※大石 銀司（土木研究所自然共生研究センター）、森 照貴（土木研究所自然共生研究センター）

**【最優秀口頭発表賞】**

OA2-07 水温の上昇がアユの産卵や遡上に及ぼす影響～水温が上昇すると孵化と遡上が遅くなる～

※瀬口 雄一（株式会社建設技術研究所）、佐藤 大生（株式会社建設技術研究所）、兼頭 淳（株式会社建設技術研究所）

**【優秀ポスター発表賞】**

PA1-05 大河川中流域を対象とした生息環境評価のためのセンシング手法の検討

※白子 賢太郎（山形大学大学院農学研究科）、渡邊一哉（山形大学農学部）

PA2-12 Understanding zooplankton community shifts across reservoir-river system using  $\beta$ -diversity metrics

※OH HYEJI（奈良女子大学男女共同参画推進機構）、原 直子（奈良女子大学人間文化総合科学研究院）、Chang Kwang-Hyeon（Department of Environmental Science and Engineering, Kyung Hee University）、片野 泉（奈良女子大学研究院自然科学系、奈良女子大学共生科学研究所センター）

PB2-03 陸上の環境DNAを効率的に捕集するKoro-rin法の開発

※垣田 真奈美（株式会社豊田中央研究所）、古田 芳一（株式会社豊田中央研究所）、田中 秀典（株式会社豊田中央研究所）

PC1-01 九州北部におけるスジシマドジョウ2亜種の環境要因および分布予測モデル構築

※永江 栄奈（九州大学大学院）、鬼倉 徳雄（九州大学大学院）

PC1-02 水生昆虫における遺伝子流動パターンに基づく生息場の連結性評価

※岡本 聖矢（土木研究所）、谷野 宏樹（長野県諏訪湖環境研究センター）、中川 光（土木研究所）、溝口 裕太（土木研究所）、森 照貴（土木研究所）

PC1-13 サシバの渡り期における飛翔高度の特徴

※兒玉 博之（徳島大学大学院創成科学研究所）、河口 洋一（徳島大学大学院社会産業理工学研究部）、佐藤 雄大（徳島大学大学院社会産業理工学研究部）

PC2-14 3次元飛翔跡データを用いた鳥類の種別別ポテンシャルの検証

※村 佳世（新潟大学大学院自然科学研究科）、鎌田 泰斗（新潟大学農学部）、関島 恒夫（新潟大学農学部）

PD1-03 森林の下層植生を面的・広域的に把握するには？～UAV高密度レーザー計測の活用～

※井上 太樹（日本工営（株））、野崎 弘道（日本工営（株））、難波 広樹（日本工営（株））、伊藤 純（日本工営（株））、森岡 千恵（日本工営（株））、瀬口 栄作（ヤマハ発動機（株））、大塚 修平（ヤマハ発動機（株））

PD2-05 斜面崩壊リスク低減に向けた草原管理手法とは？～崩壊確率と崩壊規模を考慮したリスク評価～

※浅田 寛喜（熊本大学大学院先端科学研究所）、皆川 朋子（熊本大学大学院先端科学研究所）

**【優秀口頭発表賞】**

OA1-03 中小河川の河道設定と洪水擾乱による水生生物群集変動との関係性について

※土方 宏治（岐阜大学大学院 大日コンサルタント（株））、原田 守啓（岐阜大学環境社会共生体研究センター）、植村 航平（大日コンサルタント（株））

OA1-05 河川水辺の国勢調査の植物調査データを用いた指標種による環境分析の試み  
※鈴木敏弘 ((公財)リバーフロント研究所)、都築 隆貞 ((公財)リバーフロント研究所)

OB1-05 河道削工法「額縫削」により中小河川に創出された一時的・恒常的水域の底生動物群集  
※阿部穂乃香 (兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科)、渡辺黎也 (兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科)、倉敷芸術科学大学生命科学部)、片野泉 (奈良女子大学研究院自然科学系)、佐川志朗 (兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科)

OB2-03 ダム下流域における濾過食者の生態機能の発揮  
※原直子 (奈良女子大学人間文化総合科学研究所)、土居秀幸 (京都大学大学院情報学研究科)、Oh Hye-Ji (奈良女子大学男女共同参画推進機構)、片野泉 (奈良女子大学研究院自然科学系、奈良女子大学共生科学研究中心)

OB2-09 ウチダザリガニ侵入防止柵を用いた水草保全対策について  
※藤井和也 (株)福田水文センター、然別湖生物多様性保全協議会)、丸山まさみ (松籜庵、然別湖生物多様性保全協議会)、鈴木綾 (鹿嶼町役場商工観光課、然別湖生物多様性保全協議会)

#### 4. 自由集会

本大会では、さまざまなテーマで10件の自由集会が開催されました。素晴らしい集会を企画、運営していた方々に御礼申し上げます。また、ほとんどの会場で定員を上回る多くの方に参加いただきました。会場の都合で立ち見の方が出たこと、時間の重複で希望の集会に参加できなかった方も多数居られたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

いずれの会場でも、熱心な発表に続いて活発な意見交換が交わされており、今回の自由集会のテーマへの関心の高さがうかがわれました。どのテーマも、今後継続・発展していく内容であり、次年度以降の学会や自由集会でも引き続き活発な議論が行われることを期待しています。担当委員という役回り上、それぞれの集会に腰を据えて参加することができなかったのが悔やまれます。

(各自由集会の内容は、プログラムに掲載した企画者様からの文章をそのまま記載しております。ご了承ください。)

報告：布野隆之 (兵庫県立大学大学院)

##### (1) 自由集会A1-01：阿川環境を語ろう！－生態学・水産学・工学の新たな挑戦』

日時:2025年9月11日(木)9:00~11:00

会場:A会場(総合教育研究棟B棟 2F B253 教室)

企画者：原田守啓1、森照貴2、坪井潤一3、山下慎吾4、佐々木慎一5

(1. 東海国立大学機構岐阜大学、2.(国研)土木研究所、3.(国研)水産研究・教育機構水産技術研究所、4. 環境省生物多様性センター、5. 栃木県立馬頭高校水産科)

内容：河川環境の定量的目標設定の議論が進む中で、環境目標には生物多様性の観点だけでなく、地域資源としての川の価値を盛り込むことも重要である。河川管理の側では長年取り組んできた「多自然川づくり」に加えて近年ネイチャーポジティブの理念が重視され、物理環境や生物多様性の保全・創出が目標としてきた。一方、水産サイドでは「環境収容力」や資源管理、生物多様性・外来生物対策など、資源の持続的利用と生態系の健全性が議論の中心となってきている。この自由集会では、河川生態学・水産学・河川工学の研究者、河川管理と内水面漁業の実務者が、「いい川」

とは何かを多角的に議論・共有する場を設定し、今後の分野横断的な学術の発展、現場での協働について参加者とともに議論したい。

(2) **自由集会A2-01:新しいニーズを切り開く 3次元技術の最新事情(環境・設計・防災)**

日時:2025年9月11日(木)14:30~16:30

会場:A会場(総合教育研究棟B棟 2F B253 教室)

企画者:大槻順朗 1、河野誉仁 2、佐藤隆洋 3、益子理 4

(1. 山梨大学大学院総合研究部附属地域防災・マネジメント研究センター、2. 鳥取大学工学部社会システム土木系学科、3. 日本工営株式会社、4. いであ株式会社)

内容:デジタルツインの発展と活用は、これまで応用生態工学会が取り組んできた自然再生を力強くアシストします。昨年度の集会では3次元技術導入で期待されるワークフローの変化や自然環境のデジタルツインのモデリング、運用について議論しました。今回は事例を環境に絞らずに、3次元の取組の先進事例を紹介し、それらをヒントに、環境や自然再生のデジタルツインについて議論を発展させたいと考えています。



(3) **自由集会A3-01:河川・ダムに関するデータベースについての意見交換会**

日時:2025年9月11日(木)16:45~18:45

会場:A会場(総合教育研究棟B棟 2F B253 教室)

企画者:一柳英隆 1

(1. 一般財団法人水源地環境センター)

内容:日本の河川・ダムでは、国土交通省やその他管理者が、流量や水位、水温・水質、生息する生物相(河川水辺の国勢調査)など多くのデータを継続的に取得している。これらのデータを集約して整理することで、個人の取得のみでは成し得ない広域・長期の解析が可能になる。しかし、これらのデータは、河川・ダム管理者が使用する前提で管理されており、広域・長期で利用しようとする研究者にとっては必ずしも利用しやすい形にはなっていない。この意見交換会は、研究者側と河川・ダム管理者との意見交換を行い、両者にとって良い形を探ろうとするものである。研究者とデータを管理している行政とが意見交換ができる場があることが重要であり、大きな義務をもたずに、一步ずつ前進させたい。今年度の集会では、とくに国以外のデータの研究や行政への活用を中心に意見交換をしたい。



(4) **自由集会B1-01:出水攪乱に対する河川生物応答パターンの解明と攪乱外力評価手法の開発**

日時:2025年9月11日(木)9:00~11:00

会場:B会場(総合教育研究棟B棟 2F B255 教室)

企画者:三宅洋 1、根岸淳二郎 2、石山信雄 2、渡辺幸三 1、比嘉基紀 3、糠澤桂 4

(1. 愛媛大学、2. 北海道大学、3. 高知大学、4. 宮崎大学)

内容:河川環境の定量的目標設定の議論が進む中で、環境目標には生物多様性の観点だけでなく、地域資源としての川の価値を盛り込むことも重要である。河川管理の側では長年取り組まれてきた「多自然川づくり」に加えて近年ネイチャーポジティブの理念が重視され、物理環境や生物多様性の保全・創出が目標とされてきた。一方、水産サイドでは「環境収容力」や資源管理、生物多様性・外来生物対策など、資源の持続的利用と生態系の健全性が議論の中心となって

きている。この自由集会では、河川生態学・水産学・河川工学の研究者、河川管理と内水面漁業の実務者が、「いい川」とは何かを多角的に議論・共有する場を設定し、今後の分野横断的な学術の発展、現場での協働について参加者とともに議論したい。

(5) **自由集会FB201：風力発電の環境アセスメントにレーダ解析を活かすことを目指して」**

日時:2025年9月11日(木)14:30~16:30

会場:B会場(総合教育研究棟B棟2F B255教室)

企画者:関島恒夫1、河口洋一2、會田義昭3、鎌田泰斗1、島田泰夫4、益子理5

(1. 新潟大学農学部農学科、2. 新潟大学佐渡自然共生科学センター、3. 環境省大臣官房環境影響評価課、4.(一財)日本気象協会、5. いであ(株))



内容: 脱原発の機運の高まりや地球温暖化防止対策としてのCO<sub>2</sub>削減の推進により、わが国では再生可能エネルギーの導入が大幅に増加している。その中でも風力発電については、東北地方から北海道にかけてのエリアが世界有数の良好な風況が見込めるという予測から、東日本を中心に多数の風力発電事業が計画・実施されてきた。さらに、海に囲まれたわが国では洋上風力の適地が多く、陸上の5倍にも及ぶ発電量が見込めるとの試算から、今後は立地制約がある陸上風力から洋上風力の時代に突入すると予想されている。一方、風力発電の推進とともに、周辺環境に及ぼす風車の影響が顕在化しており、特に、鳥類・コウモリ類などの飛翔動物については、風車ブレードに衝突する事故が世界的に多発している。陸上風力による鳥類への影響予測は、これまで目視観察による鳥衝突確率の算出により推計されてきたが、より広域かつ一様な環境の洋上では、陸上風力アセスで実施してきた手法を適用することは難しい。本集会では、洋上風力の環境影響を評価する手法として、広範囲にわたり物標を補足できるレーダ手法に着目し、その課題と将来性について、国、民間企業、研究者の取り組みを紹介する。

(6) **自由集会B301：斬新的・独創的に生物多様性・生態系を観測する:平成29年7月九州北部豪雨後の生物調査での試み」**

日時:2025年9月11日(木)16:45~18:45

会場:B会場(総合教育研究棟B棟2F B255教室)

企画者:鬼倉徳雄1、乾隆帝2、中島淳3、栗田喜久1

(1. 九州大学大学院・農、2. 福岡工業大学・社環、3. 福岡県・保環研)

内容: 河川生態学術研究会筑後川Gでは、平成29年7月九州北部豪雨後の生態系の回復過程を追跡してきた。そして、その後の災害復旧を目的とした大規模な河川改修の影響、さらには令和5年に新たに生じた豪雨の影響を調査してきた。その中で、生物多様性の回復に着目して研究を進めるうえで、難しい点もあった。例えば、生態系に大きなインパクトを与える災害はどこで発生するか、事前に分からぬため、被災前の生物の状態が把握できていない点である。また、広域的に被災したケースでは、その生物調査のエリアも広域的であることが望ましいが、時間と労力を考慮した時、広域的な採捕調査は難しいこと、被災河川に魚類などのメジャーな水生生物が生息しない場合でも、何かしらの分類群で評価を試みる必要があることなども研究当初の課題であった。その他、大規模河川改修が確定した川に「種の保存法」の指定種が生息した場合の緊急対応、そして、災害や河川改修の影響調査がほとんど行われてこなかった遺伝子レベルでの評価なども、本グループで取り組んできた。今回は、約5年間の研究の中で実践してきた、斬新的あるいは独創的な生物多様性評価・生態系評価について紹介したい。

(7) **自由集会FC1-01：研究から実践へ:GI/NbSで描く持続可能な地域のかたち」**

日時:2025年9月11日(木)9:00~11:00

会場:C会場(図書館ライブラリーホール)

企画者:上野裕介1、森岡千恵2、鎌田磨人3

(1. 石川県立大学、2. 国土技術政策総合研究所、3. 徳島大学)

内容:応用生態工学は、自然の力を活かしたグリーンインフラ(GI)や、自然を基盤とした社会課題の解決手法(NbS)を通じて、持続可能な地域づくりに貢献し得る学際的分野である。しかし、研究成果と社会実装の間には依然として大きなギャップが存在し、技術や知見を地域に根付かせるためのノウハウやプロセスは十分に確立されていない。地域のステークホルダーとの信頼関係の構築、活動目標の合意形成、そして実践への展開が不可欠である。本研究集会では、各地で進められている実践事例の共有を通じて、学術・行政・企業・市民社会の知を結集し、GI/NbSの社会実装を加速するための理論と実践の接続点を探る。

(8) **自由集会FC1-01:「遺伝子解析で解き明かす流域生態系のつながり」**

日時:2025年9月11日(木)14:30~16:30

会場:C会場(図書館ライブラリーホール)

企画者:岡本聖矢1、中島颶大2、平野佑奈3、竹中將起4

(1. 土木研究所自然共生研究センター、2. 北海道立総合研究機構林業試験場、3. 国立環境研究所気候変動適応センター、4. 筑波大学生命環境系)

内容:流域は上流から下流にかけた河川流程を軸に、水田、湧水や氾濫原湿地など多様な環境を包含している。こうした環境に適応した生物種や、これらの環境を生活史の中で行き来し、利用する生物種により、流域の生物多様性は維持されている。一方で淡水域に生息する生物種は、気候変動や人工構造物、土地利用変化、河川改修による影響を受けている。流域生態系の保全には質の高い生息地やそれらの連結性を把握することは重要な課題であるが、これらの評価に生物種の遺伝子解析で得られる遺伝構造の情報は有用である。本集会では、遺伝子解析による評価手法について触れた後、河川を基軸とした様々な環境に生息する生物種の遺伝構造をもとに生息地の連結性を評価した事例を発表する。また、環境DNA分析も含めた近接分野の動向も踏まえ、今後の展望についての話題も提供する。集会参加者とも意見交換し、流域生態系における遺伝構造と生息地の連結性の評価に関する理解を深めたい。



(9) **自由集会FC3-01:「これからダムの生態系管理はどうあるべきか?」**

日時:2025年9月12日(金)9:00~11:00

会場:C会場(図書館ライブラリーホール)

企画者:一柳英隆1

(1. 一般財団法人水源地環境センター)

内容:ダムは貯水、流況変化、土砂移動遮断、有機物・栄養塩循環の変化等を通じて流域生態系に影響を与えます。水源地生態研究会は1998年以来、この影響を科学的に理解し、望ましいダム水源地域と管理のあり方を研究してきました。ダム水源地域のあり方を考えるために、ダムによって変質した生態系の回復だけにとどまらず、気候変動や社会情勢の変化を背景に、流域の生態系や生物多様性をより健全化するダム管理とはどうあるべきかを考える必要があります。水源地生態研究会5年間の研究タームを終え、次のフェーズへ移行するにあたり、今回の自由集会では、同研究会の一部の成果を基に、これからダム管理のあり方について議論を深めたいと思います。



(10) **自由集会FC401: 扇状地河川で治水・利水・生物多様性の両立する水マネジメントを考える」**

日時: 2025年9月12日(金) 13:00~15:00

会場:C会場(図書館 ライブライアリーホール)

企画者: 大槻順朗 1、唐沢和輝 1、八重樫咲子 1、指村奈穂子 1、松浦拓哉 1、田和康太 2、巖島怜 3

(1. 山梨大学、2. 国立環境研究所、3. 九州工業大学)

内容: 河川生態学術研究会富士川グループでは、我が国を代表する扇状地河川である富士川をフィールドに、扇状地河川の特性に寄り添った治水・利水・環境の統合的マネジメントのあり方を提案するための研究を進めています。本自由集会では、これまでの中間成果を報告するとともに、扇状地河川の特性を生かした水マネジメントのあり方について議論を行い、地域特性に応じた流域治水の展開手法への理解を深めます。

## 5. 公開シンポジウム

応用生態工学会第28回新潟大会公開シンポジウム『生態系ネットワーク形成を基軸とした地域づくりを目指して』は、2025年9月13日(土)に新潟市の朱鷺メッセ・国際会議室を主会場とし、Zoomウェビナーと併用して開催されました。

シンポジウムのキーワードは、生態系ネットワークとしました。生態系ネットワークの形成は、これまでもさまざまな自然再生の中で取り組まれてきました。そして今、国として生態系ネットワークの形成を後押しする動きが出てきています。令和6年5月に、国土交通省により「生物の生息・生育・繁殖の場としてもふさわしい河川整備及び流域全体としての生態系ネットワークのあり方検討会」の提言が公表されました。その中で、「生物の生活範囲は必ずしも河川内にとどまるものではなく、農地や農業用排水路など流域の生息・生育・繁殖の場との行き来など、相互に影響し合っている場合もあるため、流域全体で考えていく必用がある」とし、流域治水を進めていく中で、併せて生態系ネットワークを形成していくことの重要性が謳われています。さらに、国は、現在、川の中を主体とした多自然型川づくりから河川を基軸とした生態系ネットワーク形成と視点を拡大し、流域の農地や森林などの施策とも連携させながら生態系ネットワークの社会実装化を目指しています。その一方で、生態系ネットワークという用語や考え方は必ずしも社会に浸透しているとはいえず、また、その取り組みに関わるさまざまな主体の間でもその意義が共有できていない可能性も否めません。このため、生態系ネットワーク形成の意義と価値について、今一度、市民と共有し、そしてその取組を地域作りにどのように活かしていくかについて、行政担当者、有識者、先進的な取組を進めている小山市、出雲市、新潟市の三人の首長をお招きし、話題提供いただくことにしました。

はじめに、大会委員長である新潟大学農学部の関島恒夫教授から公開シンポジウム開催にあたっての趣旨説明が行われた後、新潟市長の中原八一氏から開会の挨拶が行われました。本シンポジウムは三部構成からなり、第一部では、「生態系ネットワークとは -その意義と国としての取り組み-」のもと2名の専門家に、第二部では、「生態系ネットワーク形成を基軸とした地域づくり」のもと3名の首長(新潟市は副市長が講演)にご登壇いただき、第三部では、第一部と第二部の演者に加え、(公財)日本生態系協会理事の関健志氏と新潟国際情報大学教授の藤田美幸氏の2名を交えたパネルディスカッションを行ないました。



第一部の最初の講演者は、国土交通省 水管理国土保全局 河川環境課長（現 国土交通省 大臣官房審議官）の小島 優 氏で、『河川を基軸とした生態系ネットワークの形成』という演題で話題提供いただきました。はじめに、河川を中心とした生態系ネットワークの重要性について、国土交通省水管理・国土保全局の立場から、河川が地域の生態系ネットワーク形成において中心的な役割を果たすことが説明され、農地や河川といった流域景観における自然再生の取組が紹介された後、生態系ネットワークの形成は、行政だけでなく地域住民や自治体の協力が不可欠であり、その連携により、気候変動や生物多様性の危機に対する対応を取ることの意義について説明いただきました。

続いて、北海道大学名誉教授の中村太士氏から、『生物生息場の連結性とネットワーク化がなぜ必要か？』という演題で話題提供いただきました。はじめに、石狩川流域での取組を紹介いただいた後、「今、このタイミングでなぜ生態系ネットワークが必要なのか」という視点から話を展開され、気候変動や生物多様性の危機など、現代的な課題への対応として連結性のある生息場の整備が求められていると説明されました。さらに、これを単なるスローガンで終わらすのではなく、科学的な根拠に基づいた実装が必要と強調され、行政・学術・地域住民の連携により初めて実現可能になると提言されました。

第二部の最初の講演者は、小山市長の浅野正富氏で、『関東におけるコウノトリに選ばれる地域づくり；コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラムの取り組み』という演題で話題提供いただきました。はじめに小山市の概要として、本市が都市と田園の調和を目指した「田園環境都市小山ビジョン」を策定していることを紹介いただき、続いて、渡良瀬湧水地のラムサール条約湿地登録に向けてこれまでの取組を、さらにそれと連動したコウノトリの定着と繁殖に関わる取組を紹介いただきました。最後に、コウノトリの定着・繁殖を支えるための市民・企業・行政の連携、および環境教育・地域振興といった交流活動を紹介いただき、小山市の将来ビジョンを語っていただきました。

第二部2人目の講演者は、出雲市長の飯塚俊之氏から、『トキも人も育つまちへ -トキの放鳥・野生復帰に向けた取組-』という演題で話題提供いただきました。はじめに、出雲市におけるトキの野生復帰に向けた取組を紹介いただき、それに伴う環境教育と市民啓発の取組、生息環境の整備、国際交流と中国との関係形成について説明いただいた後、「トキも人も育つまちへ」として、自然と人が共生する社会の実現に向けた抱負を語っていただきました。

第二部3人目の講演者は、新潟市副市長の野島晶子氏から、『ラムサール条約湿地都市認証と国際湿地都市新潟の未来』という演題で、新潟市の湿地保全と国際的な都市ブランド化に向けた取組について話題提供いただきました。はじめに、新潟市の湿地と生態系について概説された後、湿地保全の歴史とラムサール条約湿地登録の取り組み、さらにはそれをより発展させた湿地の再生と「ラムサール条約湿地都市認証」までの取組を紹介いただき、湿地の利活用と観光資源化、国際交流と湿地都市としてのブランド化の推進について説明いただきました。

第三部は、第一部と第二部の講演内容をもとに、「生態系ネットワーク形成を基軸とした地域づくりの社会実装と課題解決」のテーマのもと、パネルディスカッションを行いました。はじめに、コーディネーターの関島恒夫氏からパネルディスカッションの趣旨説明がなされた後、講演を聴いた上での各首長の感想を述べていただき、その後、専門家からの意見を述べていただいた上で、パネラー間で活発な意見が交わされました。パネルディスカッションを通して、生態系ネットワーク形成をスローガンで終わらさないためにには、技術論の確立、行政の横断的



小島優



中村太士



浅野正富



飯塚俊之



野島晶子



パネルディスカッション

関健志氏

藤田美幸

連携（特に、河川行政と農地行政、国と地方自治体など）、地域資源の活用と市民参加、企業・大学の役割が必要であり、それらの推進を図っていくことが公開シンポジウムのメッセージとして提案されました。また、登壇者、特に首長から、今後の地域づくりに向けた力強いメッセージが発信されました。パネルディスカッションは、生態系ネットワークを単なる環境施策でなく、地域の未来を形づくる戦略的な取組として捉える視点を提供するものであったと総括できます。

最後に、閉会の挨拶として、国土交通省北陸地方整備局河川部長の木村勲氏から、生態系ネットワーク形成を推進していくことの強いメッセージをいただき、公開シンポジウムを締めていただきました。

本シンポジウムの参加者はオンライン参加を含め、約500名の方にご参加いただきました。ご登壇いただいた皆様、運営にご協力いただいた皆様、そして参加していただいた多くの皆様のおかげで本シンポジウムを無事実施することができました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。



報告：関島恒夫（新潟大学）

## 6. 企業展示

企業展示には、応用生態工学会賛助会員3社、非賛助会員7社に加え、行政機関や地域団体3団体を含む計13の企業・団体にご参加いただきました。展示内容としては、バイオロギング技術による動物の行動追跡機材や小型観測ロガーなどの調査機器、環境DNA分析技術、AIを活用した植生解析、VR・ゲームエンジンによる景観モデル、護岸ブロックの景観評価手法、環境に配慮したコンクリートブロック、BSC工法（土壌藻類を活用した自然にやさしい侵食防止／植生形成技術）など、最新の技術や資材が紹介されました。さらに、越後平野の生態系ネットワーク形成、トキの野生復帰に向けた川づくり、国際湿地都市NIIGATAの取組みなど、地域に根ざした活動も展示されました。加えて、里山再生プロジェクトによる無農薬の棚田からつくられた日本酒、潟の恵みであるヒシの実を活用した焼き菓子、規格外農産物を活用した食品の販売なども行われました。3日間にわたり、各企業・団体から多様な技術サービスや製品、取組み事例についてご紹介いただきました。

報告：諫佐晃一（日本工営株式会社）



株式会社田中三次郎商店



株式会社生物技研



株式会社プラントビオ



株式会社建設環境研究所



Biologging Solutions 株式会社



株式会社荒川企業



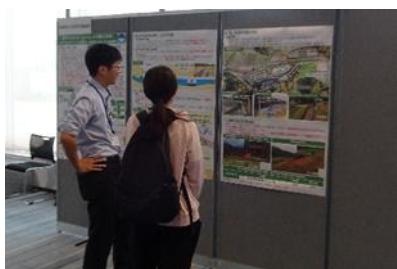
株式会社アドヴァンス



日本工営株式会社



株式会社 U・STYLE



新潟県土木部河川整備課

越後平野における  
生態系ネットワーク推進協議会

新潟市環境政策課



シーズキッチン・rucoto



会場の様子（新潟大学）



会場の様子（朱鷺メッセ）

## 7. キャリアパス支援WG企画「ランチタイム座談会」と「懇親会キャリアマッチング」

応用生態工学会初の試みとして、新潟大会では、キャリアパス支援WGと若手の会が共催し、大会参加の展示企業や協賛団体（企業・役所・財団・研究機関など）が話題提供し、学生・若手会員の研究や仕事のキャリアパスの情報交換の場として活用してもらうランチタイム座談会を実施しました。また、大会の懇親会の場において、個別に企業・団体の話を聞きたい学生・若手会員を紹介する懇親会キャリアマッチングを実施しました。

ランチタイム座談会では、教室がいっぱいになるほどの来場者があり、各企業・団体がそれぞれのPRを3分で行いました。懇親会キャリアマッチングでは、懇親会の歓談時間に、学生・若手会員と各企業・団体を引き合わせ、自由に交流してもらう形としました。参加した学生・若手会員からは、応用生態工学分野に関する団体・企業を同時に知れたり、個別に話を聞けたことが、一般的な合同企業説明会とは違ってよかったです等の感想がありました。

今回は急な企画にも関わらず、多数のご参加やご支援をいただきありがとうございました。キャリアパス支援WGでは、引き続き大会プログラムの中で、会員のキャリアパス支援企画を行う予定です。ご意見・ご要望等ありましたら、キャリアパス支援WGまでお知らせください。

ランチタイム座談会

日時：9月12日（金）12時～13時

場所：総合教育研究棟B棟 B252

参加団体：10団体（1官庁、2財団法人、7企業）

懇親会キャリアマッチング

日時：9月12日（金）19時～21時

場所：アートホテル新潟駅前 越後西の間

参加団体：11団体（1官庁、2財団法人、8企業）

ランチタイム座談会の様子

報告：石田裕子（摂南大学）

**8. 懇親会**

懇親会は、新潟駅直結のアートホテル新潟駅前 越後の間に開催しました。本懇親会には156名（一般126名、学生30名）にご参加を頂き、地方開催にもかかわらず大盛況となりました。

懇親会は応用生態工学会 占部会長の乾杯にてスタートし、新潟県内の食材を用いたホテルのお料理や、普及・連携委員から持ち寄られた地域のお酒を皆さんに堪能いただきました。懇親会の中では、キャリアパス支援WGと若手会の共催のキャリアマッチングが行われ、若手参加者と企業・団体・大学研究者の皆様との交流が行われました。また、ポスター発表最優秀賞を受賞されました、大石銀司様より挨拶をいただきました。他に、占部会長より来年の全国大会が東京開催になる発表があり、次回大会実行委員になられる予定の東京大学吉田先生からご挨拶をいただきました。最後に、実行委員一同を代表して関島実行委員長より挨拶させていただきました。

例年と同様に、普段なかなか直接お会いする機会の少ない遠方の皆様と、お料理やお酒を楽しみながら2時間があつという間に感じるような盛り上がった懇親会となりました。参加頂きました皆さんに改めて御礼申し上げます。また、各地域から美味しいお酒をご持参いただいた普及・連携委員の皆様、ありがとうございました。

報告：近藤伸介（株式会社キタック）



応用生態工学会 占部会長



関島 大会実行委員長



東京大学 吉田先生



会場の様子（左と中：歓談の様子 右：普及・連携委員が振る舞う地元お酒コーナー）



参加者の集合写真

## 9. エクスカーション

大会最終日となる令和7年(2025年)9月14日(日)、雨上がりの秋晴れのもと、全国から25名の参加者の皆様をお迎えし「エクスカーション」が開催されました。

今回のエクスカーションは、都市の水辺から、農地、潟に至るまで、新潟の多様な水環境を巡り、各現場で奮闘されている方々から直接お話を伺うことで、実態や課題を肌で感じることができ、参加者と説明者の間で活発な意見交換が行われました。

各視察地での状況

### ① ミズベリング信濃川やすらぎ堤

朝一番に訪れたのは、新潟市を中心市街地を流れる信濃川やすらぎ堤です。ここでは、国土交通省北陸地方整備局の担当職員から、河川敷地占用許可準則の緩和制度を活用した「河川空間のオープン化」について説明がありました。民間事業者のマネジメントによりオープンカフェやBBQ施設が立ち並び、多くの人々で賑わう魅力的な空間へと生まれ変わっています。参加者からは、治水や維持管理などの質問が寄せられ、都市河川における水辺空間の新たな価値創造に対する関心の高さがうかがえました。



### ② 阿賀野川自然再生事業（沼海地区：浅場の再生）

次に、雄大な阿賀野川の沼海地区に移動し、自然再生事業の現場を視察しました。阿賀野川河川事務所の副所長より、越後平野の生態系ネットワークの基軸として、ハクチヨウのねぐらやサギ類の餌場となる「浅場」の再生を目指す計画が語されました。かつての河道内砂利採取等により進行した河床低下と樹林化（二極化）という課題に対し、天敵の侵入を防ぐ中州や多様な水深を持つ浅場を創出していくアプローチの説明がありました。



③ 阿賀野川自然再生事業（大河原通管：横断的連続性の確保）

続いて、阿賀野川本川と堤内地の水田地帯をつなぐ大河原通管にて、「横断的連続性の確保」の取り組みを視察しました。ここでは、本川と水路の間に存在する落差や急流が、ドジョウやタナゴ類といった水田水路を生息場とする魚類たちの移動を妨げていることが課題となっています。阿賀野川河川事務所の副所長からは、本格的な魚道整備に先立ち、土嚢を用いた簡易魚道による実証実験を行い、対象魚種の遡上能力に適した設計条件を確認し、今後、工事をしていくことが紹介されました。



④ 宮尾農園（自然農法・有機農法）

新潟市北区で自然農法・有機農法を実践されている宮尾農園を訪問しました。黄金色に輝く稲穂が揺れる田んぼを前に、宮尾農園の宮尾氏ご本人から、農薬や化学肥料に頼らず、生きものとの共生を目指す農業について、熱意のある説明に、参加者は深く感銘を受けました。



⑤ 福島潟（潟水面の拡張）

エクスカーションの締めくくりは、水の公園「ビューフ島潟」です。屋上から潟の雄大なパノラマを眺めながら、新潟県の担当職員より、治水と環境の両立を目指す「潟水面の拡張事業」について説明を受けました。



## 10. 公開トークセッション「えちごエコネットと福島潟エリアの未来」

会場をビューフ島潟6Fの展望ホールに移し、一般の方も参加可能な公開トークセッションを開催しました。このトークセッションは、前日に開催された公開シンポジウムにおける議論を踏まえ、開催地である新潟で国土交通省北陸地方整備局が中心となり展開している「越後平野の生態系ネットワーク（えちごエコネット）」について、学会員、地域住民、行政関係者、および「えちごエコネット推進協議会」のメンバーを交えて意見交換を行うことを目的としています。エクスカーション参加者に加え、一般市民7名が参加し、越後平野の豊かな自然を未来につなぐための具体的な方策について活発な議論が展開されました。

セッションの第一部では、生態系ネットワークの推進と地域資源の利活用に関する話題提供が行われました。まず大会委員長であり、えちごエコネット推進協議会会长でもある新潟大学の関島恒夫教授から、趣旨説明がなされました。生態系ネットワークの形成は、生物の習性を理解した上で、技術や理論に基づいた形で進めることが重要であると強調した上で、えちごエコネットにおいては、オオヒシクイ、ハクチョウ類、トキを指標種とし、潟を中心としたネットワークに加え、潟をまたぐネットワークを保障する必要性について説明がありました。

続いて、えちごエコネット事務局（国土交通省北陸地方整備局・（公財）日本生態系協会）から、えちごエコネットの取組概要について説明がありました。「越後の自然をひとつつなぎに」をキーワードに、ガン類やトキなどが住みやすい環境づくりを通じ、私たちの暮らしも豊かにすることを目指し、「生息環境の保全・再生」と「地域の活性化」の二つの柱で進められていること、特に河川と農地の一体的な取組や、多様な主体（行政、専門家、地域住民）の協働が重要であることが強調されました。

また、地域の利活用の取組として、福島潟と瓢湖から事例紹介がありました。福島潟については、ビューフ島潟の副館長である佐藤安男氏から、ラムサール条約のワיזユース（賢明な利用）に基づき、生態系機能を維持しながら持続的な利用を目指す「潟ツーリズム」の取組（潟舟体験や潟弁当の開発、レンジャーガイドによる有料ガイドの提供）が紹介されました。瓢湖については、瓢湖白鳥観察舎販売組合の代表理事である土井一心太氏から、若い一般層へのアプローチとして専門知識を押し付けるのではなく、ファッショナブルやカフェなど「誰かの好き」と瓢湖の魅力を掛け合わせるアプローチを採用していることが報告されました。ハ

クチョウモチーフのグッズ販売（Tシャツ、ガチャガチャ）やカフェ運営を通じ、環境分野でキャリアを保証できるような第三の組織設立も模索しています。

第2部ではファシリテーターにえちごエコネット推進協議会の自然環境活用部会部会長である新潟国際情報大学の藤田美幸教授を迎え、「福島潟とえちごエコネットの未来を語る」をテーマに、質疑応答と意見交換が行われました。

会場の参加者からの経験に基づいた意見をベースに、フィールドミュージアムとしての広域連携の可能性や、潟舟などの地域資源の高付加価値化と持続可能な活用、潟へのアクセスの課題と「水の都」としての魅力発信、次世代への教育と「自然の寺子屋」の提案など、様々な意見交換が行われました。

また、パネリストからは、えちごエコネットの未来に向け、若年層へのアプローチやスペシャルな高付加価値ツアーの展開、「潟の駅」や潟を巡る自転車専用道路などのインフラ整備といった展望が示されました。



潟の食材を使った昼食の「潟弁当」



佐藤安男氏によるヒシの説明



関島恒夫教授による趣旨説明



福島潟を臨む会場の様子



参加者からの質疑



パネルディスカッションの様子

報告：河口洋一（新潟大学）

## 1.1. 大会を終えて

処暑も過ぎてもまだ暑かった令和7年9月11～14日、応用生態工学会新潟大会2025を無事開催することができました。内容は昨年同様に、研究発表（口頭発表、ポスター発表）と自由集会は対面のみの開催としました。口頭発表（39件）・自由集会（10件）には多くの聴講者が参加され、また、活発な質疑応答が行われました（ポスター発表80件）。朱鷺メッセにて行われた公開シンポジウムには約500名（オンライン含む）の参加があり、一般市民の方々に生態系ネットワーク形成を基軸とした地域づくりについて知っていただくとともに、「応用生態工学」を広く普及するイベントになりました。エクスカーションには25名にご参加を頂き、国土交通省の阿賀野川自然再生事業や新潟県の福島潟湿地再生事業等について、現地で取組状況を確認することができました。懇親会には156名にご参加を頂き、地方開催にもかかわらず大盛況となりました。

本大会準備は、昨年7月に関島先生から「次回全国大会を新潟で開催できないか」と相談されたことからスタートしました。応用生態工学会新潟は5名体制であるため、当初、全国大会の運営は不可能ではないかと不安でしたが、関島先生の情熱と、先生の右腕 関島研究室 樋浦委員をはじめ実行委員の皆様の力添えにて、準備を進めることができました。

また、今回大会がこのように大きな混乱もなく大変盛り上がりのある会になったのは、ご参加いただきました皆様の素晴らしい研究・業務成果の発表をいただいたおかげであることは勿論のこと、大会の陣頭指揮を執って下さった関島実行委員長、当大会の準備・運営に携わってくださった実行委員、サポートいただいた学会本部、会場設営・当日運営をお手伝いいただいた学生などの多くの関係者のご尽力の賜物であります。

改めて、ご参加いただいた皆様や大会運営に関わって下さったすべての皆様に、深く感謝いたします。

新潟大会2025実行副委員長近藤伸介（株式会社キタック）



実行委員会・大会運営メンバー



新潟大学会場入口



シンポジウム会場

## 第28回新潟大会2025実行委員会

	氏名	所属
大会実行委員長	関島 恒夫	新潟大学
副委員長	近藤 伸介	株式会社キタック
実行委員 (五十音順)	伊川 耕太 池田 寛美 石田 裕子 板倉 舞 伊藤 絵理子 今井 孝幸 今井 菜摘 上山 麻由子 江口 健斗 風間 善浩 鎌田 泰斗 河口 洋一 小林 勘太 権田 豊 佐渡 正 佐藤 伸彦 諫佐 晃一 関 健志 高木 真也 竹内 聰 竹澤 聰美 武野内 祐樹 田村 恭平 丹野 幸太 中野 雅子 中村 美羽 波多野 玄 林 達夫 原 文宏 樋浦 正子 樋村 正雄 平野 博範 藤田 美幸 布野 隆之 星 剛介	株式会社建設環境研究所 株式会社建設環境研究所 摂南大学 北陸地方整備局 公財)日本生態系協会 北陸地方整備局 株式会社キタック 株式会社キタック 株式会社建設環境研究所 株式会社グリーンシグマ 新潟大学 新潟大学 株式会社建設環境研究所 新潟大学 佐渡技術士事務所 公財)日本生態系協会 日本工営株式会社 公財)日本生態系協会 株式会社建設環境研究所 八千代エンジニアリング株式会社 N Eテクノ株式会社 日本工営株式会社 アジア航測株式会社 アジア航測株式会社 株式会社エコノス 北陸地方整備局 株式会社グリーンシグマ 大日本ダイヤコンサルタント株式会 社 株式会社建設技術研究所 新潟大学 いであ株式会社 株式会社国土開発センター 新潟国際情報大学 兵庫県立大学大学院 アジア航測株式会社

益子 理	いであ株式会社
松村 拓樹	株式会社建設環境研究所
丸谷 成	応用地質株式会社
村上 拓彦	新潟大学
森田 弘樹	株式会社サンワコン
山浦 知雄	株式会社グリーンシグマ
山崎 憲人	北陸地方整備局
山下 沙織	新潟大学
横山 良太	株式会社建設環境研究所
渡部 悟	株式会社キタック
学会本部	専務理事
天野 邦彦	事務局長
齊藤 泉	
沖津 二朗	情報サービス委員 応用地質株式会社
(以上、敬称略)	

## 6 第2回廣瀬賞発表・受賞講演会報告

令和7年9月13日新潟大会の会場にて廣瀬賞等の授賞式が執り行われました。受賞者および受賞理由は以下の通りです。

### 【廣瀬賞】

北海道大学 地球環境科学研究院 教授 根岸 淳二郎氏（51歳）

根岸 淳二郎氏は、流域を淡水生態系管理の単位として捉え、環境保全および持続的利用へ有効な環境政策や事業計画の決定に重要な科学的な知見や評価方法の提言をすることを研究活動の主目的としてきた。これまでの研究では山地小河川から中下流域の規模の大きな河川、さらに低地の水路や氾濫原水域まで流域各所の主要淡水域を扱っており、以下の4つの課題に分類される優れた成果が得られた。

#### 課題①：河道構造の改変・劣化と生物やその生息場の関係に関する研究

河川改修や水質劣化により水生生物の多様性や生息密度が著しく低下する事を示した。一方で、人工構造物の河道への投入に伴う河道構造の複雑化や適切な土砂・水質管理に一定の環境回復効果があることを示した。また、保全対象とすべき水生生物が、河床の安定性などに寄与することも野外調査で示した。

#### 課題②：森林河川や中流域水域における生物間相互作用や食物網に関する研究

落葉や付着藻類などを基盤とする食物網の可視化を行い、河川表面水域に加えて、世界に先駆けて河床地下域の食物網やその河畔域へのつながりを解明した。北海道における2016年の記録的洪水や福島第一原発事故によるセシウム汚染の河川・河畔生態系への影響も詳細に報告した。

#### 課題③：森林伐採やダム操作が河川環境に及ぼす影響に関する研究

森林流域の水・土砂流出モニタリングにより、森林伐採やダムなど人工構造物が山地流域の水・土砂流出に与える影響を評価した。木材の搬出用林道が溶存炭素、カリウムや細粒土砂などの主要な生産源で下流への汚濁源であることや、林道の回復にシダ植物が重要であることも明らかにした。また、支流河川を考慮したダム・土砂管理の重要性も示した。

#### 課題④：農業用水路・下流域氾濫原の水生生物生息環境保全に関する研究

平野部の農業用水路や河川近傍の氾濫原域では、河川改修や圃場整備の影響により在来水生生物種の生息環境が急激に劣化している。劣化の現状と自然再生時のポイントとなる環境要因（水域連続性など）などを示した。成果は、岐阜県関市による水路再生事業や、国土交通省による中部・北海道地方を始めと

して全国の氾濫原水域に着目した自然再生事業を実施する際の評価基準・科学的根拠の一つとして広く活用されている。

上記4課題に関してこれまでに発表された査読付き論文は100編を超え、これまでの論文被引用総数は、3,818件(Google Scholar; 2025/6/27)である。

根岸氏の研究は河川生態系を4次元(空間の縦断、横断、および垂直の3次元および時間次元)の観点から包括的に扱う点、そして生態系構造から機能までを扱う点において独創的である。特に、氾濫原環境(横断)および河床間隙(垂直)の研究において、国内外における科学的知見の不足を飛躍的に補った。また、手法的な強みは、多様な測定法(古典的な種同定と個体数計測から、安定同位体比分析や遺伝子解析など)と対象生物種(水域・河畔陸域の無脊椎動物から小型脊椎動物)を科学的な問に応じて柔軟に使い分け、生物を個体群あるいは群集の観点から重層的に扱える点である。応用生態工学という学問分野は、その発展において異分野間の相互理解・協働を必要とする。根岸氏は、学術面においても現場への応用面においてもバランスよく質の高い研究成果を上げてきており特に体系化を見据えた総合力が高いという点が評価され、今後も、科学的新規性に富み応用生態工学的に価値ある分野横断・融合型研究を推進し、自然生態系の保全、後進の育成および学会の発展に資することが期待される。

社会への貢献として、行政関係の委員会、検討会、研究会にも多数参画し、河川環境の保全や河川に生息する生物の保護に尽力している他、応用生態工学会においては、将来構想委員会(2028年から現在まで)、全国大会札幌大会副実行委員長(2010、2021年)、地域研究会札幌副代表(2010年から現在まで)、会誌編集委員長(2022年から現在まで)、国際交流委員長(2016-2018年)、幹事(2015-2017年)を歴任し、応用生態工学会への貢献も顕著である。さらに、小学校、中学校、高等学校向けに川や水に係る教育活動にも積極的に参画している。

このように、根岸淳二郎氏の顕著な研究業績は、応用生態工学の研究発展や教育等に指導的役割を果たしている。また、極めて高く評価できる根岸氏の学術的および社会的貢献は現在も継続進行されており、今後の研究や学会における活躍が期待されることから、応用生態工学会廣瀬賞にふさわしいと判断され、第2回応用生態工学会廣瀬賞を授与することとした。



根岸淳二郎氏賞状授与



根岸淳二郎氏受賞講演

#### 【研究奨励賞】

国立研究開発法人 土木研究所 流域水環境研究グループ 自然共生研究センタ  
ー 専門研究員 岡本 聖矢氏 (31歳)

北海道立総合研究機構 さけます・内水面水産試験場 研究職員 東垣 大祐氏 (29歳)

岡本聖矢氏がこれまでに取り組んできた、水生昆虫類を対象にした河川生態系の生物多様性維持機構の解明は、遺伝子・種・群集という自然の階層をつなぐ新しい結果を導き出し、生物多様性を考慮した河川管理を進めていく上で重要な知見を提供してきたと考えられる。特に、生物多様性の維持・創出という河川の環境管理上の主題について、生息場条件を加味した流量およびその変動特性に対する水生昆虫の応答を評価することで、生息場の維持・創出につなぐメカニズムをさらに解明することは、河川の環境管理のあり方について具体的な指針を定めるための基盤の1つ(水生昆虫についてではあるが重要な進展)になっていくと期待される。また、その成果は、国際的にインパクトの高い雑誌にも掲載されている。以上のことから、研究奨励賞の最終候補者として推薦することとした。

東垣大祐氏は、膨大な野外データの収集により、魚類(イワナとアマゴ)を対象に河川環境と生物間相互関係を明らかにしてきた。地道な作業から実証データを取得し、実際に起きている事象(源流域におけるイワナ優占)の発生機構を明らかにし、その成果を河川環境の保全に活かそうという姿勢が評価された。以上のことから、研究奨励賞の受賞者とすることとした。



岡本聖矢氏受賞講演



東垣大祐氏受賞講演

## 7 2025年度派遣報告

### 4th Sediment Bypass Tunnel Workshop 参加報告

京都大学 防災研究所  
中村亮太

#### (1) はじめに

応用生態工学会による2025年度海外学会等への派遣員募集事業による助成を受け、2025年9月8日から10日にかけてミュンヘンで開催された4th Sediment Bypass Tunnel Workshop(以降、SBT-WS)に参加させていただきました。本誌面をお借りして、SBT-WSへの参加報告をさせていただきたいと思います。

## (2) SBT-WS の概要

ワークショップ名にも含まれる sediment bypass tunnel（土砂バイパストンネル）は、貯水池上流とダム下流をつなぐトンネル施設のことを指します。洪水時には、貯水池に流入する土砂や濁水が SBT によって貯水池を迂回し、ダム下流に放流されます。これにより、貯水池堆砂の進行を抑制することができ、持続可能な貯水池運用が可能となります。さらに、土砂が枯渇し、劣化したダム下流の環境が、SBT による土砂供給によって修復することができます。応用生態工学会第 26 回京都大会において「森川里海をつなぐ『砂の道』～総合的な流域管理に向けて～」と題した公開シンポジウムが実施されたように、貯水池堆砂とその対策は、応用生態工学会とも関連の深いテーマであると思います。

SBT-WS は、これまでスイス（第 1 回）、日本（第 2 回）、台湾（第 3 回）で実施されており、今回のドイツでの開催が第 4 回となります。いずれの国も、土砂生産が多く、SBT による貯水池土砂管理が実施されています。WS では、SBT を中心として以下の 5 つのテーマが扱われました：(1) 貯水池堆砂問題とその緩和、(2) Sediment yield prediction and routing、(3) SBT の計画や設計、建設、(4) SBT の運用と維持管理、(5) 最近の実験や数値シミュレーション、フィールド調査、(6) 河川地形や生態系に関連した側面（和訳は筆者による）。SBT-WS と銘打っているだけあり、SBT を中心としたプログラムでしたが、筆者が流水型ダムをテーマに発表を行ったように、SBT 以外の貯水池堆砂対策（フラッシングやスルーリングなど）に関する研究も少なくありませんでした。

SBT-WS は、Technical University of Munich (TUM) の主催で、3 日間のスケジュールで実施されました。WS では、基調講演や口頭発表、テクニカルツアーなどが行われました。基調講演では、角哲也特定教授（京都大学防災研究所）や、Gregory L. Morris 博士（GLM Engineering Group、USA）、Robert M. Bose 教授（ETH Zurich、Switzerland）など、ダム分野をけん引する著名な研究者による講演を聴講することができました。口頭発表は計 34 件と、小規模ではありましたが、その分参加者間の密な交流ができたのではないかと思います。

WS2 日目は、TUM のメインキャンパス（ミュンヘン）からインスブルック（オーストリア）に移動し、TIWAG（オーストリアの電力会社）が管理する hydropeaking retention basin（ハイドロピーキングによる急激な水位変動を抑えるための調整池）と、建設中の揚水発電所を見学しました。オーストリアでは電力の約 60%を水力発電によって賄っているとのことで（日本は約 7.5%）、水力発電に関する研究も日本より盛んである印象を受けました。3 日目には、オーベルナッハ（ドイツ）に移動し、TUM の水理実験施設（Obernach Research Institute）を見学しました。ここでは、教育のための水理実験だけではなく、実際のダムの設計のための実験も行われているようです。ダム建設現場や大規模な水理実験設備など、応用生態工学分野と関連はするものの、普段あまり触れることがない分野に触れることができ、大変勉強になりました。

## (3) 私の口頭発表に関連して

WS 初日に、“Flood Retention Dams in Japan and their impact on benthic invertebrate communities” のタイトルで口頭発表をさせていただきました。この研究は、日本の流水型ダムを対象に、それらが底生動物群集に与える影響について評価したものです。国内 7 基の流水型ダムを対象とした現地調査の結果、ダム下流の底生動物群集はダム上流（レファレンス地点）とよく似ていたこと、貯水池内では河床材料の細

粒化によって群集が変化する可能性があること、堆砂量の年変動が流水型ダムによる底生動物群集への影響を予測する指標となりえること、について紹介しました。

ドイツやオーストリアをはじめとしたヨーロッパ諸国では、多くの洪水調節池 (flood retention basin) が建設されており、その一部が日本の流水型ダムと共通する特徴を有しています。また先述の hydropeaking retention basin のように、洪水調節の目的以外にも河川水を一時貯留するための施設が多く存在します（これらは必ずしも空虚な貯水池ではない）。そのような背景もあってのことか、参加者には日本の流水型ダムにも興味を持っていただき、有意義な議論ができました。

#### (4) さいごに

海外で開催される国際会議への参加は今回が初めてです。また、今回が人生2度目の海外渡航となりました。博士後期課程では研究の進捗が芳しくなかったことから、海外経験を積むことなく大学院を修了してしまいました。今回のWS参加によって、海外が少しだけ身近に感じられるようになりました。今後も研究成果を国内外に向けて発表できるように精進したいと思います。

また、WSの最後には、2027年に第5回 SBT-WS が北海道で開催されることが発表されました。応用生態工学会関係者の方々にも広くご参加いただき、皆様のユニークな取組みを広く知っていただきたいと思います。末筆となりますが、このような貴重な機会をいただきました応用生態工学会と京都大学防災研究所 角哲也特定教授に感謝申し上げます。



図1 参加証明

## 2025年度派遣報告

41st IAHR World Congress 参加報告  
山口大学大学院 創成科学研究所  
福丸大智

### 1. はじめに

この度、2025年度海外学会派遣助成制度によるご支援を頂き、6月22—27日にかけてシンガポールで開催された 41<sup>th</sup> IAHR World Congress (IAHR: International Association for Hydro-Environment Engineering and Research)に参加いたしました。本誌面をお借りして、ご報告いたします。

### 2. 学会参加の概要

#### (1) 学会の概要

IAHR は、全世界における 5000 人以上の水関連の研究者・技術者からなる組織で、World Congress を 2 年に 1 度開催しています。今年の World Congress は、“innovative water engineering for sustainable development”をテーマに掲げており、気候変動がもたらす水環境問題に対して水工学分野の最新の知見や技術を集結するとともに、それを最大限に活用するための総合的なアプローチに関する情報交換を目的に開催されました。学会会場は、シンガポールのチャンギ国際空港から地下鉄(MRT)で 1 駅の EXPO 駅に隣接する Singapore EXPO です(写真 1)。開会式では 3 名の研究者および政府関係者による基調講演も開催され、自然を活用した解決策(Nature Based Solutions : NBS)に関する研究事例や取り組みが紹介されていました。また、NBS に関する話題は、開会式以降の 5 日間で開催されたポスター・口頭発表のセッションでも数多く議論されており、海洋、湖沼、河川の様々な水域を対象とした研究や技術開発に関する内容が報告されておりました。我が国でも、流域治水とグリーンインフラのコラボレーションが図られているように、生態系が有する多様な機能を治水安全度の向上に寄与させるような治水・環境の調和した流域管理が世界中で必要とされていることを再認識しました。

#### (2) 発表概要

私は、最終日(6月27日)の午前のセッション“Eco-and Environmental Hydraulics”で “Prediction of Climate Change Impact on River Temperature in the First Class Rivers of Chugoku Region Using Deep Learning”という題目で発表しました(写真 2)。本研究は、AI 技術の一手法である深層学習を用いて流域一貫の河川水温予測モデルを開発するとともに、気候変動が中国地方一級水系の河川水温に及ぼす影響評価まで実施したものです。セッションでは、私が発表した河川水温に関する内容のほかにも、物質や土砂の輸送から生態系まで幅広い現象を対象とした実験やモニタリング、シミュレーションに関する研究発表も数多くされており、大変刺激になりました。



写真 1 学会会場の Singapore EXPO



写真 2 口頭発表の様子

## 現地での学び

前述のように、41<sup>th</sup> IAHR World Congress では NBS に関する議論が多くありましたが、その中でシンガポールの事例も紹介されていました。水資源の確保に注力するシンガポールでは、雨水の循環管理を促進するために、“Active Beautiful Clean (ABC) Waters”を策定し、複数の河川や貯水池を対象として積極的にグリーンインフラの整備を進めています。の中でも、私が河川工学を専門にしていることもあり、多機能型都市河川公園「ビシャン・パーク」の事例が特に気になったため、最終日の帰国までに残された



写真3 ビシャン・パークの(a)整備区間と(b)その上流にある未整備の河道の様子



写真4 河道内の様子と遭遇した生物

((a)河道内, (b)魚類, (c)カメ, (d)オオトカゲ)

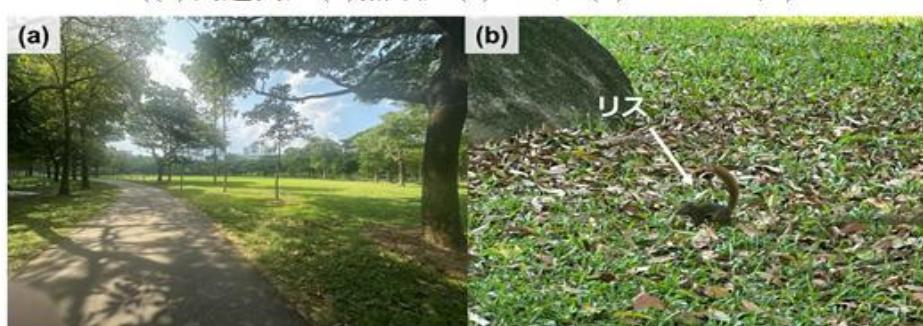


写真5 沼澤原の様子と遭遇した生物

((a)沼澤原, (b)リス)

数時間で現地視察に行きました。ビシャン・パークは、シンガポール東部のカラム地区を流れるカラム川の一部で、もともとはコンクリート三面張りだった河道区間を多自然型の河川に整備したものです(写真3(a))。周辺にビル群が広がっていたことや、写真3(b)のように公園から上流側の河道がコンクリート三面張りだったこともあり、都市域の中に広がる大自然にはかなりの衝撃を受けました。整備区間は全長約3kmでしたが、帰国までの時間が限られていたこともあり、上流1km区間を視察しました。まず、河道内に入ってみると、写真4(a)に示すように植生が広がり、魚類(写真4(b))やカメ(写真4(c))、さらには日本では見ることのないオオトカゲ(写真4(d))まで多くの生物が生息する多様な環境が形成されていました。一方で、氾濫原の様子は写真5(a)のようになっており、晴れた日は人の憩いの場として利用されているだけでなく、リス(写真5(b))などの小動物も生息していました。ここまでは、晴れた日のビシャン・パークに広がる多様な生態系について述べましたが、豪雨時は都市域での河川氾濫による被害を防ぐために河道から溢れた水を貯留する役割も果たしています。そのため、パーク内には水位標(写真6(a))に



写真6 公園内における防災に関する設備

((a)水位標, (b)水位上昇時に機能するブザー, (c)水位上昇時の立ち入り規制標識)

加え、水位上昇時に機能するブザー(写真6(b))や住民へ立ち入りを規制するための標識(写真6(c))が設置されました。このように、シンガポールで行われている河川管理に実際に触れることができたのは、非常にいい経験でした。

#### おわりに

この度、2025年度海外学会派遣助成制度によるご支援を賜ったことで、世界中で行われている最新の研究を把握できただけでなく、実際に現地に行ってシンガポールの河川管理にも触れることができ、大変貴重な経験になりました。学会の目的にもありました、気候変動がもたらす数多くの問題に対し、あらゆる知見や技術をどのように集結し、活用していくかを今一度考える機会は非常に重要と考えます。私は、今回の学会で深層学習という最新技術を活用した多流域の水温予測手法を発信しました。その一方で、より深く現象を理解しようとすると、最新技術だけでなくこれまで河川工学で用いられてきた数値解析や、現地観測も欠かせません。加えて、今後の流域管理では複雑に絡み合う物理・生物現象の理解がより一層求められますが、この実現にはあらゆる分野の融合が必要になると考えています。気象・水文、河川、さらには水域の生態系まで幅広い分野で数々の研究・技術開発の議論が繰り広げられた今回の学会は、上

記のようなことを再認識するのに非常に重要な機会になったとともに、今後の自身の研究のモチベーションにもなりました。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を与えてくださった応用生態工学会に厚く御礼申し上げます。

## 8 行事予定・報告

### ○テキスト刊行委員会 2025年度これまでの活動

#### 1. 委員会の開催

- ・第1回会議（対面） 2025年9月12日 12:00～13:00

- 1) 『教科書企画』について再検討した。
- 2) 『応用生態工学会テキストシリーズ』について、候補企画の進捗と今後の進め方を協議・共有した。

#### 2. 教科書企画の進捗

- ・占部会長にも参加いただき、教科書企画の経緯、意図、これまで検討した構想、構成、再検討のために聴取した意見を共有し、それらを踏まえて、本企画を再考した。
- ・応用生態工学を体系的に語る教科書は困難との見解にたち、事例紹介をベースとした内容にすることで一致した。
- ・第1部で「応用生態工学の考え方・位置づけ」を明示し、第2部で「応用生態工学の理解に資する事例紹介」を行いつつ、重要用語はコラムで扱うスタイルとする。

#### 3. 各テキスト企画の進捗状況

##### 1) 出版済みテキスト

「第1弾：河道内氾濫原の保全と再生（2019.9）」、「第2弾：水田環境の保全と再生（2024.9）」を出版済み。

##### 2) 保留となった企画案

- ・「中小河川」：社会的課題の変化等から技術の体系的記述が困難と判断。
- ・「河川汽水域」：国交省「汽水域の河川環境の捉え方に関する手引き書」を超えて、テキストとしてまとめるには時期尚早と判断。

##### 3) 新企画の始動

- ・「(仮) 河川の流量と生態系～応用生態工学的アプローチ～（森照貴・三宅洋 編）」の企画を始動した。
- ・既刊2つは「場」に着目したが、今回は「要素」に着目したテキストとする。
- ・目次案を作成した。執筆者、編集委員を構成中。
- ・2025年度内に編集委員会の組織、出版社との契約、執筆者の内諾等を予定。

#### 4. テキストの活用等

- ・2025年9月4日、農業農村工学会において、テキスト「水田環境の保全と再生」の内容を踏まえた企画セッションを行った。

【企画セッション 15】農業農村工学と応用生態工学から考える水田環境の保全と再生（オーガナイザー：田和康太）

- ・農業農村工学会の「著作賞」に応募した（推薦者：柿野亘、候補者：田和康太・永山滋也）。

## ○情報サービス委員会の報告

情報サービス委員長  
久加 朋子

2025年6月～11月の期間について、情報サービス委員会は以下の対応を行いました。

### 1. ホームページ関連

- ・総会資料、役員・委員名簿、シンポジウム等の各種情報を掲載。
- ・ホームページ上での受講証明書（CPD）発行に対応。

### 2. 大会運営支援

- ・応用生態工学会第28回新潟大会実行委員会に委員として参画し、Web関連を支援。

### 3. ウェビナー配信協力

- ・以下のイベントにおいて、Zoomウェビナー配信を担当しました。
  - 東北の河川環境を語る（応用生態工学会R7年度東北地区総会記念講演）[開催：8月9日]
  - 応用生態工学会第28回新潟大会 公開シンポジウム「生態系ネットワーク形成を基軸とした地域づくりを目指して」[開催：9月15日]
  - 第23回北信越現地ワークショップ in 長野「流域治水の観点から上下流の連続性を考える」[開催：10月9日～10日]
  - 応用生態工学会金沢研修会「能登の復興とグリーンレジリエンス」[開催：11月28日]

### 4. システム・サーバー管理

- ・学会会員管理システムの移行対応。
- ・学会サーバーの管理を適宜実施。

### 5. 委員会開催状況

- ・当該期間中、委員会の開催はありませんでした。

#### 令和7年度の活動状況（学術交流委員）

- ・海外学会等への派遣者についての募集（令和6年度）に対して、4月に派遣者の選考を行った（6件の応募に対し、2名を選考）。
- ・2月下旬に、令和8年度の海外学会等への派遣者についての募集を進める予定。締切は例年通り3月末。
- ・3月下旬に、京都で河道形状と生態系保全に関する国際シンポジウムを開催予定。応用生態工学ではこれまで2年に一度国際シンポを開催してきたので、学会が主催の開催に向けて今後準備予定。

## ○令和7年度の活動状況（会誌編集委員会）

- データペーパの DOI 取得から承認システムを確認し、発刊までのプロセスを整理した。
- 編集幹事会にて、投稿されたデータペーパをガイドラインに照らして査読に回すかの議論を行った。
- 28-1号の最終確認を行い、発行準備を完了した。
- 新規で特集号1件の申し込みを受け付けた。

### ○普及・連携委員会の開催報告

普及・連携委員会では、東北地区会、九州地区会に続き、各地域での地区会の設立に向けて検討・準備を進めています。

令和7年11月8日、普及・連携委員会が主催する熊本フィールドシンポジウム（九州地区会担当）の開催に合わせて、令和7年度第2回普及・連携委員会を対面とオンラインで開催しました。各地域の特性に応じたこれまでの活動を、今後も持続的にかつ、より発展的に実施していくため、地区会の設立にあたっての課題とその対応を検討しています。

地区会の設立にあたっては、各地区の会員のみなさまの入会をお願いしています。会員相互の親睦、学術の進展、そして地域貢献にご協力ください。

また、地域における研究活動、研究成果の普及および関係機関等との連携の推進のため、今後もフィールドシンポジウムを各地域の持ち回りで開催していく予定です。来年は富山での開催を計画しています。ぜひ、ご参加ください。

（普及・連携委員会が主催する各地域での活動）

開催日	地 域	行 事
2025年8月5日	東北地区	東北地区総会 記念講演 「東北の河川環境を語る」
2025年10月9日	長 野	第23回北信越現地ワークショップ in 長野 「流域治水の観点から上下流の連続性を考える」
2025年11月8日～9日	九州地区	第15回全国フィールドシンポジウム in 熊本 「地域共創の流域治水と環境を活かした地域活性化」
2025年11月25日	名古屋	河道掘削パターンによる応答に関する勉強会（治水と環境の観点より）
2025年11月28日	金 沢	能登の復興とグリーンレジリエンス
2025年11月28日	富 山	自然・社会環境の移り変わりからみた「とやまの河川」を考える
2025年12月6日	松 山	重信川ウォーク（松原泉～広瀬霞～霞の森公園）
2026年1月23日	札 幌	第5回北海道の応用生態工学 「全国大会の発表を札幌でも（2025新潟大会） 「廣瀬賞受賞講演（根岸淳二郎氏）、研究奨励賞講演（東垣大祐氏）」
2026年1月予定	九州地区	九州地区事例・研究発表会

## 9 2025 年度行事経過と今後の予定

### 2025 年度（令和 7 年度）行事の予定

7月1日	2025 年度(令和 7 年度)開始
7月	第 2 回役員候補者選考委員会（7月 4 日開催） 第 1 期第 8 回書面理事会（7月 24 日廣瀬賞承認決議） 第 3 回役員候補者選考委員会（7月 25 日開催）
8月	ニュースレター109号（8月 8 日発行） 第 1 期第 9 回理事会（8月 27 日開催）
9月	応用生態工学会第 28 回全国大会（新潟大会） 9月 11 日（木）：研究発表（ポスター発表）、自由集会 9月 12 日（金）：研究発表（口頭発表）、自由集会、懇親会 9月 13 日（土）：総会、表彰、廣瀬賞発表・記念講演会、 公開シンポジウム 9月 14 日（日）：エクスカーション 第 2 期第 1 回総会（9月 13 日開催） 第 2 期第 1 回理事会（9月 13 日開催）
10月	
11月	
12月	ニュースレター110号発刊予定 理事会（12月 9 日開催予定）
1月	
2月	
3月	ニュースレター111号発刊予定 廣瀬賞等の募集予定 2026 年度海外学会等への派遣員の募集予定
4月	
5月	
6月	ニュースレター112号発刊予定 理事会予定

## 9 事務局より

### 会員管理サービスシステム活用のお願い（会員情報変更、総会資料の受け取り方指定）

1. 会員情報の変更登録は、学会ホームページトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「マイページ」にログインし、「マイページ」の下の方にある、「会員情報を変更する」をクリックして、変更登録を行ってください。
2. 会員情報変更のご連絡は、学会事務局 eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌(希望者のみ)のお届け、ニュースレター、その他の連絡では、かなりの「不達が発生」しています。

連絡先等の変更連絡をよろしくお願ひいたします。

3. 「マイページ」にある、「会員情報を変更する」のページの最下段に、「総会招集の通知および総会関係書類の電磁的方法による送付」の選択項目があります。電磁的方法（インターネット）による総会開催通知等の受取りの許諾をお願いします。

(説明) 郵送の代わりに電磁的方法（インターネット）により総会開催通知等をお送りするためには、法の定めるところにより、正会員お一人お一人から、個別に承諾を頂く必要があります。

当学会の事務局は2名体制で何とか業務を遂行しております。お送りする資料は書面も電子ファイルも同内容です。皆様の1分のお手間で、事務局の業務が大きく軽減されます。

もちろん書面の送付が必要という方には、郵送いたしますが、電子ファイルでの受け取りを承諾いただける方におかれましては、許諾いただけますと幸甚です。

皆様のご協力が、事務局業務の大きな助けになります。どうかご協力ください。

### 退会の申し出は「退会フォーム」にてお願いします

退会の申し出については、事務局の見落とし等をさけるため、①「学会ホームページ退会フォーム」または ②「事務局あてに退会の連絡メール」により連絡をお願いいたします。

## 会員数の比較

令和7年11月30日現在の会員数と前年との比較

	R7年11月30日	R6年8月20日	増減
正会員	802	841	-39
学生会員	139	141	-2
賛助会員	45	45	0